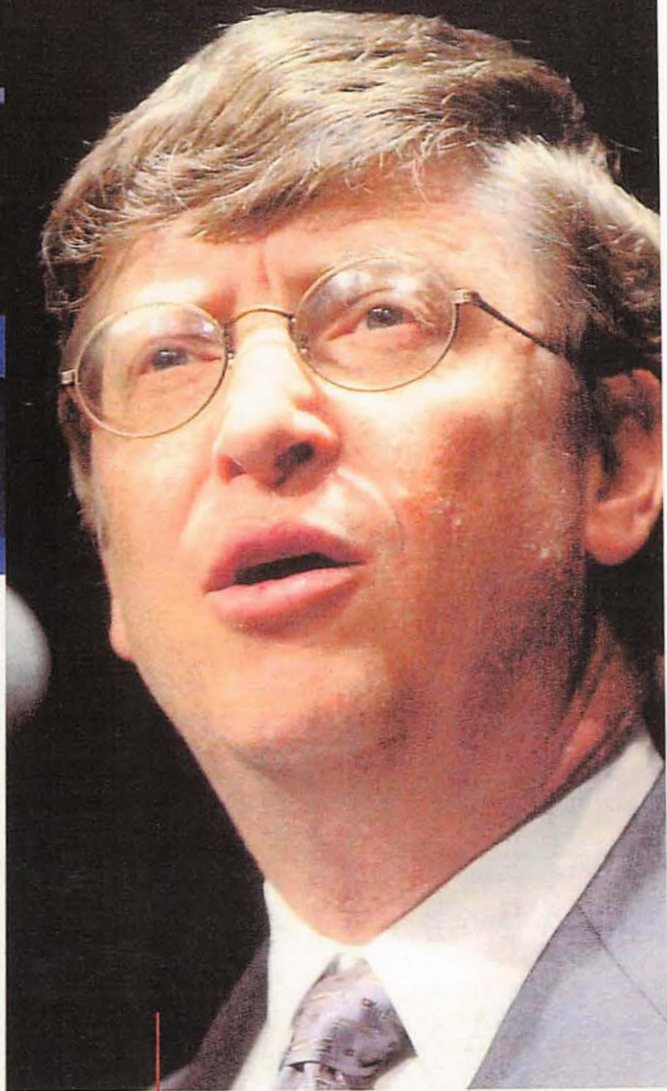


世紀が変われば、人の評価も、やがて一変する。今、頂点にある権力者がどん底に落ち、パツとしない指導者が歴史上の偉人になることだってあり得るのだ。まして、タブーや聖域がなくなった、なんでもありの時代、明日、どんなスキャンダルや大激変があるかも分からない。現代世界の先頭に立つ、この権力者たちは21世紀、結局、笑うのか、泣くのか。

誰が笑い、誰が泣く

マン



ほころび始めた「帝国」

帝国崩壊の不安をブリッジで紛らすビル・ゲイツ

席卷した「ウィンドウズ」に代わる新戦略を練り上げるためだ。しかし、経営の屋台骨を揺るがした反トラスト法(独禁法)訴訟では、米連邦地裁から分割命令を突きつけられ、係争中。ライバル企業の攻勢が強まり、幹部社員「頭脳流出」も止まらない。「帝国崩壊」の声は日に日に強まっている。

世間がうらやむ個人資産にも、陰りが見え始めた。ゲイツ氏が米フォーブス誌の長者番付で世界一に輝いたのは92年。翌93年こそブリッジの師匠であるパフエット氏に首位を譲ったものの、その後は7年間、首位を維持しつづけ、直近でも資産は630億ドル(約7兆円)と天文学的数字だが、それでもハイテク株バブルの破裂で、前年より220億ドルも減少した。最近の株価急落を考慮すると、364億ドル程度まで落ち込んでいるとする試算もある。

ブリッジ大会の成績は参加者約260人中、上位10傑にも入らなかつたゲイツ氏。「失敗から学ぶこと、それが一番大切」と言い残して去った。氏がオンライン上でブリッジを楽しむ際のコードネームは、「チャレンジャー」。自ら挑戦しつづけなければ沈没してしまう不安を、象徴しているかのようだ。

(ニューヨーク支局 坂本裕寿)

泣く

ハイテク企業の雄・マイクロソフト帝国を率

いるビル・ゲイツ会長(45)と、ウォール街では泣く子も黙る米国人投資家ウォレン・バフェット氏(70)。仕事も年齢もかけ離れた二人の付き合いは10年に及ぶが、世界の大富豪という点以外にも意外な共通点がある。最も知的なカードゲームと言われる「ブリッジ」愛好家であることだ。

12月3日、米ネブラスカ州オマハで開かれたブリッジの地方大会。オマハ在住のパフエット氏がゲイツ氏を招待した。「刑務所に入る時は、ブリッジの相手を連れていくよ」と切り出したパフエット氏に、「そのときはボランティアで参加しなくちゃね」とゲイツ氏が

応じるほど、ブリッジ狂いは徹底している。

億万長者らしからぬ二人のライフスタイルも、ウマが合う理由だ。大会前日、そろって「ディナー」に出掛けた先はマクドナルド。客の一人が「もしかして、お二人はあの……」と口ごもると、ゲイツ氏はチーズバーガーをバクつきながら、「多分ね」と笑顔で答えた。

こうしたりラックス気分とは裏腹に、ゲイツ氏にとって、この1年は75年のマイクロソフト創設以来、最も胃の痛い日々の連続だった。

1月、最高経営責任者(CEO)の職を盟友のステイブ・バルマー社長に譲り、自らは技術開発の最高責任者に就任した。世界を

21世紀も この人がキー



台湾初の政
権交代から7
か月。陳水扁

総統(49)民進党と野党の対立で内政混乱が続くなか、李登輝前総統(77)国民党への期待感が高まっている。政界からは「混乱を收拾できるのは李氏だけだ」との声も聞こえてくる。

李氏が引退して3か月後、私的な席で、こんなふうに語ったことがある。

「陳水扁さんは、どれだけ出来るか。彼は哲学もやっていないし、語学もやっていない。弁護士試験に通った後、選挙、選挙をやった人だから……。評価は就任半年後、11月ごろ下せるでしょう」

その11月、陳総統は自分が打ち出した第4原発中止を巡って、それに反対する野党と激しく衝突し、罷免運動で火たるまになつた。李氏の洞察力、衰えずである。ただ、李氏にとって陳総統の苦境は痛しかゆしでもある。自ら「私の功績は台湾の民主化を進

め、政権交代を実現したこと」と言う以上、政権を渡した相手が火だるまでは自分の功績も台無しになりかねない。

李氏は公の場では、現在の政治状況にはほとんど触れない。最近では唯一、10月末にチエゴを訪問した時、同行の台湾人記者団に、こう語っている。

「ぼくが政権の座に就いた時、今の陳水扁より権力は少なかった。ぼくの第一歩は忍耐だった」

「今の政府の問題は、経験不足から来ている。少数与党は多数党に助けを求めなくては。権力を分けなければいられない」

李氏は、あからさまには語らないものの、陳総統の独りよがりの政治手法に危うさを感じている。

李氏には、実は、やり残したことが二つあるとされる。訪日とノーベル平和賞の受賞だ。

訪日は、10月の松本市(長野)での日台シンポジウム出席が中国の反対で果たせなかったため、2001年に再チャレンジする。

ノーベル平和賞は、李氏が総統時代から、ひそかに意欲を燃やしていたものだ。李氏は先のチエゴでの会見でも、「私は90年に、

中国大陸との関係は内戦状態を維持してはならないと思いに至り、彼ら(中共政権)が大陸を管轄していることを認めた。また、台湾と大陸の間に当然、往

来がなければならぬと考えた。大陸はいま、私のことを厳しく罵っているが、私のやったことは、

韓国の金大中の太陽政策よりも、もっと多い。(台湾から)延べ1600万人が大陸を訪問し、500億台湾ドルが投資された。これは、いずれも私が任期内に行ったことだ」と語っている。こうした自負は強い。

台湾にとっては「民主の父」、中国にとっては「歴史の罪人」。東アジアに一つの時代を画した哲人政治家は、21世紀に入ってから笑顔でスポットライトを浴びる場面がありそうだ。

(台北支局 河田卓司)



私こそノーベル賞

李登輝・前総統
台湾政局横目に
ノーベル賞狙い